

サン・シモン派の社会思想：バザールを中心として

小林, 栄三郎

<https://doi.org/10.15017/2335165>

出版情報：史淵. 56, pp.187-197, 1953-03-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

サン・シモン派の社會思想

——バザールを中心として——

小林 榮 三 郎

1

5 わゆるサン・シモン派 (Les Saint-Simoniens) が一致結束して活動したのは、一八二五年十月から一八三二年十一月まで、わずか六年あまりのことであつた。死期の近いのを知つたサン・シモンが一八二五年五月十九日に最後の教訓を與えたとき、枕元に集つた弟子は、銀行家ロドリゲス (Olinde Rodrigues)、文學者アレヴィ (Léon Halévy)、法律家マヴホルシエ (Duverrier)、醫師ベリエ (Baillif) の四人で過ぎなかつた。そのうちマンマンタン (Barthélemy-Prospér Enfantin, 1796—1864)、バザール (Saint-Amand Bazard, 1791—1832) など同志を加え、同年十月に週刊誌「生産者——産業・科學・美術の哲學的雜誌」(Le Producteur, Journal philosophique de l'Industrie, des Sciences et des Beaux-Arts) を遺訓にしたがつて發刊するに及んで「サン・シモン派」の確立を見たのであるが、この雑誌は翌年十月には廢刊のやむなきに至つた。しかし、その後サン・シモン派の人々は内面的に一層結びつきを密にするとともに、外部にもはたらきかけ、特に理工科學校 (l'Ecole polytechnique) の學生のなかに優秀な同志をえた。さらに一八二八年の末からパリーのタランヌ街 (la rue Taranne) に移しては、サン・シモン主義の講演會を開催し、大に世人の注目をひいた。講演會場はタランヌ街からモンシニエ街 (la rue Monsigny) に移つて一八三〇年の初めまで續行され、豫期以上

の盛況をかちえた。その間、一八二九年八月十五日から週刊誌「組織者」(L'Organisateur)を發行してゐる。けれども、この頃までは主として知識階級に呼びかけるに止まつて、その活動も小規模であつた。ところが一八三〇年の七月革命によつて大衆の運動が保守體制をゆすぶるに及んで、いよいよ大衆にはたつきかけようとして、はなはなしい活動を展開する。すなわち一八三〇年十二月廿七日からは日刊新聞「地球」(Le Globe)がサン・シモン派の機關紙となつて、「各人にはその能力に應じて、各能力にはその仕事に應じて」(A chacun selon ses capacités, a chaque capacité selon ses oeuvres)という標語を掲げ、翌年の春からはフランスの南部・東部・西部、さらにベルギーやドイツの一部にまで宣傳運動をくりひろげ、フランス朝野の耳目をそばだたしめた。しかしながら、こうした目ざましい活動も永くは續かず、一八三一年十一月には早くも内部の分裂によつて、バザール、カルノー、(Lazare Hippolyte Carnot, 1801—1888) ルルー (Pierre Leroux, 1798—1871)その他の有力分子が脱退し、バザールは一八三二年に死んだ。以後なおアンファンタンを中心とする少數の一團はサン・シモン派としての團結を維持したが、衰微の一途をたどつた。けれども、主としてバザールの手に成る「サン・シモン敎説解義」(Exposition de la doctrine de Saint-Simon)二卷(一八三〇—一八三一年刊)はそののちも版を重ねて多くの影響を與え、十九世紀社會思想史上の重要文獻の一つとなつてゐることは、あらためて説くまでもなす。

宮川實氏編「空想的社會主義と科學的共產主義」(青木文庫、經濟學講座第十卷、一九五一年刊)は、「刊行のことば」によると、「ソ同盟大百科辭典の中のすぐれた諸論文や、戦後にあらわれた國際的諸文獻を整理・増補して單行本の形にまとめたものである」といわれ、また「はしがき」によれば、「本書の編集にあつては、橋本弘毅が原典から取材し、宇治田富造がこれを整理統一した」とあるが、同書六二頁にはサン・シモン派についてつぎのように記されている。

「サン・シモンの死後は、かれの弟子(バザールやアンファンタン)は、かれの思想の宣傳を繼續したのであるが、

かれらは、主としてサン・シモンの學說の皮相的・半宗教的な面だけを會得し、その結果、サン・シモン學派は、まもなく解體し、半宗教的な孤立的な宗派となつてしまつた。個々のサン・シモン主義者たちはそのご、資本主義の顯著な理論家、實際家となつた。「各人にはその能力に應じて、各能力にはその仕事に應じて」という有名な公式は、サン・シモン主義者が提唱したものである。この公式ははじめのうちは、協同會社の各成員にたいして、たんにその勞働によつてばかりでなく、その才能に應じて仕拂わなければならないという意味に理解され、そしてこのことが平等論者の攻撃をよびおこした。最初このサン・シモン主義の影響下にあつたルイブランは、この公式を變更して、欲望に應じての分配といふる共産主義者の分配原則を借用し、「各人はその能力に應じて、各人にはその欲望に應じて」という公式を主張した。だが、これら二つの公式は、第三章でべるるように、共産主義社會の相ことなつた二つの發展段階に照應するものであることはいふまでもないことである。」(旁點小林)

しかし、果して「サン・シモンの弟子(バザールやアンファンタン)」は、「主としてサン・シモンの學說の皮相的・半宗教的な面だけを會得」(旁點小林)したといえるだろうか。サン・シモン主義者が提唱した「有名な公式」は、かれらが師の學說の本質的な面を理解したものでなかつたならば、到底生れえなかつたものではないか。しかもそうした本質的な面の理解は、「主として」ではなく、副次的な理解に過ぎなかつたのであろうか。「かれの弟子(バザールやアンファンタン)」という表現が「かれの弟子(バザールやアンファンタンなど)」と書きあらためらるべきことはいふまでもないが、それにしてもバザールとアンファンタンの二人を一括してこのように論じ去るということは、適當であらうか。サン・シモン學派の解體は、アンファンタンの方針にたいするバザールたちの反對、それにもとづく脱退・分裂によるものではなかつたか。なるほど、サン・シモンの學說の宗教的方面については、バザールをも含めてサン・シモン派が「皮相的・半宗教的な面だけを會得」したという批判が妥當するであらう。しかし社會思想的方面については、弟子たち、わけてもバ

ザールは決して皮相的な面だけではなく、本質的な面をも理解し、さらにこれを發展前進せしめたものではなかつたか。——こうした疑問から私は以下、「サン・シモン敎説解義」を中心として、なかならずバザールの社會思想をかえりみたと思う。

二

シャルレティの「サン・シモン主義史」(一九三一年刊)によると、バザールは一七九一年九月十七日にパリに生れているから、一八二五年にサン・シモン派に加つたときには三十四才であつた。一八一四年パリ廓外サン・タントワースの戦いでは勳章レジオン・ドヌールを興えられたほど勇敢に奮闘したが、そのうち、ナボリの炭焼黨員であつたデュシェ(Dugied)や當時醫學生であつたビュシエ(Buchez)などとともにフランス炭焼黨を結成し、オート・ヴァント(Haute-Vente)地区の部長となつた。かれらは陰謀によつて政府をくつがえそうと考えたのであつて、一八二一年ベルフォール(Belfort)における陰謀ではバザールが首謀者の一人であつた。これが失敗に歸してバザールは欠席のまま有罪判決を受けたが屈せず、フランス西部を歩きまわつて畫策に努め、ポルドーにおける炭焼黨の會議には二度まで議長となつた。しかし、それらの畫策が成功をおさめなかつたために、やがてその實際的價値について反省するようになった。すなわち、こうした計畫がたとえ成功したとしても、どんな進歩が現實にもたらされるか。復古王朝をくつがえしたあとで、どんな政治をうちたてるべきか。炭焼黨の奉ずる自由主義は、人間關係を規制するに不十分ではないか——というよな疑問が起つてきた。のちにバザールは當時の心境を回顧して、つぎのように書いてゐる。「批判的哲學(La philosophie critique)や革命的政治(La politique révolutionnaire)が現代にとつて無能であることを悟りはじめ、不毛であることを感じていた矢先に、サン・シモンの色んな著書が私の注意をひきつけた。この大膽な革新家の思想は、私が久しく本能

的に求めていた新しい世界の胚種であるように思われた」と。以來、かれはこの胚種を育てようと決心してサン・シモン派の一員となり、やがてその首領的資質と、大膽にしてしかも堅實な演繹を好む明晰にして論理的な知性によつて、アンファンタンとともにサン・シモン派の巨頭の一人となつたのである。

講演會を開催してサン・シモンの見解を組織的・體系的に解説しようとする計畫がいつから確立したかは明らかでないが、一八二六年十月に「生産者」が廢刊となつてのち、アンファンタンが一時在學した理工科學校の學生にはたらきかけてシセル・シニヴァリエ(Michel Chevalier)やアンリ・フルネル(Henri Fournel)その他の優秀な同志を獲得したのが一八二七年七月以降のことで、その頃から、個人的に宣傳するよりも集團的な宣傳方法をとつた方が有利であるという意見が次第に生れ、一八二八年に入つて講演會の準備にとりかかつたと見るのが妥當であらう。¹⁰「最も古顔の連中、すなわち、バザール、ビュシエ、オランド・ロドリグおよびウーシエヌ・ロドリグ (Eugène Rodrigues) 兄弟、ローラン(Laurent) ヲルシユラン(Margerin)、アンファンタンが講演の準備に協力したが、しかし、ほとんど常にバザールがこの學派の代辯者であつた。(Bazard fut presque toujours le porte-parole de l'Ecole.) したがつて、準備の仕事ではかれが主役を演じた (il joua le principal rôle dans le travail préparatoire)」と考えて差支えな⁵とシャルレティは書いてゐる。¹¹サン・シモンおよびサン・シモン派研究の一權威とされるルロワもその「フランス社會思想史」(一九五〇年刊)に講義(Leçon)は「ほとんどすべてサンタマン・バザール——サン・シモン主義に共鳴した前炭焼黨員、ルナンから賞讀された例外的知性の持主、かがやかしい雄辯家——によつて行われ、ついで大カルノーの息子によつて編集された」と述べてゐる。¹²しかし、シャルレティによると、上巻はカルノー、フォルネル(Faurel)、デュヴェリエ(Duveyrier)により、下巻はカルノーとバザールによつて編集された、とある。いずれにしてもバザールが「解義」の構成に主な役割を演じたことについては異論がないようである。

三

サン・シモン派の社會思想をうかがうための資料としては、上記のように「生産者」、「地球」その他があり、殊にアンファンタンについては全集も出ているが、社會思想史の觀點から最も大きな影響力をもつたものが「サン・シモン敎說解義」であることは、すでにムックレをはじめとして多くの人々の指摘したところである。この「解義」の一部がルロワ編「社會主義のフランス先驅者」(一九四八年刊)¹³におさめられて、わが國の研究者にも近ずきやすいものとなつたことは、まことによろこばしい。

「今までは人間が人間を收奪した。主人は奴隸を、ローマ貴族は平民を、領主は隸農を、地主は小作人を。有閑者と勤勞者(Oisifs et travailleurs)、これぞ、現代に至るまでの人類前進の歴史である。萬人の結合(ASSOCIATION UNIVERSELLE)、これぞ、われらの未來である。各人にはその能力に應じて、各能力にはその仕事に應じて(a chacun suivant sa capacité, à chaque capacité suivant ses oeuvres)これぞ、征服と生誕との權利に取つて代る新しい權利である。もはや人間は人間を收奪せず(l'homme n'exploite plus l'homme)、人間は人間と結合して、自分の力にゆだねられた世界を收奪するのだ」と「解義」はうたつてゐる。有閑者が勤勞者を收奪した舊來の社會に代つて、未來の社會は收奪なき社會、搾取なき社會である。これまでの權利は最も強い者(Le Plus Fort)の權利であり、これまでの社會は生誕による特權(Le privilège de la naissance)の社會であつた。將來の社會は、こうした特權に代つて能力の權利が支配する社會でなければならぬ、とさうのである。

生誕による特權の廢止とさうことは、相續權を否定することである。遺産の相續が認められているからこそ、富める親の子として生れた者が能力に相應しない地位にあつて社會の進歩を阻害し、貧しき親の子として生れた者は、能力をもち

ながら能力を發揮する機會を與えられずに終るといふ現象が生ずる。相續をやめて、財産の本當の所有者は個人でなくして社會・國家であることにしなければならぬ。相續權は家族の手から離れて國家・社會に移らねばならぬ——こうした考え方を「解義」は繰返し力説している。しかも、このような所有權の轉移が、人類進歩の必然的法則として考えられているところに、サン・シモンの歴史觀・社會觀を繼承發展せしめたサン・シモン派（なにかんずくバザール）の社會思想の特色があるといえよう。「一般に所有權は、道義的あるいは法律的なあらゆる變革の圏外にあるかのように考えられているけれども、實は、所有される對象の性質・使用・讓渡などについて、絶えずモラリストからも立法者からも干渉を受けてきたのである。」現在すでに、財産の一段と大きな部分が従前よりも多數の勤勞者の所有に歸しており、「そのために有関的所有者 (les propriétaires oisifs) の社會的重要性は、勤勞者が日々獲得する社會的重要性に比して、弱小化してきている。今日、最後の變化が心然的となつた。(Aujourd'hui un dernier changement est devenu nécessaire.) これを準備するのはモラリストの仕事であり、ついでこれを規定するのが立法者の仕事である。われわれがこれまで考察してきた前進の法則は、蓄積された富が經濟學者のいわゆる生産資財を構成する限りにおいて、その蓄積された富を、もはや家族でなくして國家が相續するような秩序を樹立しようとしてゐる。(La loi de progression que nous avons observé, tend à établir un ordre de choses dans lequel l'état, et non plus la famille, héritera des richesses accumulées, en tant qu'elles forment ce que les économistes appellent le fonds de production.)」となつて、國家は「勤勞者の結合」(ASSOCIATION DES TRAVAILLEURS)となり、相續權はこの國家に移轉されるのであつて、かくして生誕の特權は、これまですでに多くの點で痛手を蒙つていたのであるが、今や完全に消滅することとなる——といふのである。

財産あるものは所有 (La propriété) とは何であるか。「解義」によれば、「財産とは、最も普通の意味では、直接に消

費される用途のものでない富、そして今日では収益を自分のものとする權利を與えるような富である。この意味において、財産は土地および資本、すなわち經濟學者のいわゆる生産資財を包括する。」しからは所有者とはいかなるものか。「われわれにいわしむれば、土地および資本は、それらがどんなものでもあつて、労働要具 (INSTRUMENTS DE TRAVAIL) である。所有者と資本家 (les propriétaires et les capitalistes) ——この兩階級はこの點をきつて區別すべきなものであるが——は、こうした要具の受託者 (LES DEPOSITAIRES) である。かれらの職務 (fonction) はそれらの要具を勤勞者 (travailleurs) に割當する (DISTRIBUER) ことである。この職務こそ、かれらが所有者あるいは資本家として遂行するところの唯一のものである。」と云つて、「果してかれらはこの職務を賢明に、大きな失費なく、業的所産増加に有利な仕方で行してゐるか。」かれらは労働要具の受託者・割當者としての職務を大きな失費なく遂行しているとはいえない。かれらの數は相當多數に上り、かれらの生活は相對的に豊かである。また産業界がしばしば激しい危機に見舞われていることから見ても、かれらの職務の遂行ぶりが感心できないものであることは明らかだ。しかし、これを咎めだてすることは無理であろう。なぜなら、かれらは「生誕の偶然 (hasard de la naissance)」によつてこうした職務を帯びることになつたのであり、労働そのものについては門外漢だからである。労働要具の割當という仕事を立派にやつてのけるためには、生産と消費とのあいだに存在する關係についての深い知識が必要であり、産業の車仕掛を動かすメカニズムに長期間なじんでいなくてはならぬ¹⁶。

産業が完成度に達するためにはどうすればよいか。それにはつぎの諸條件が必要である。すなわち「(一)要具は産業の各地区および各部門の必要に応じて分配されること、(二)要具は、最も有能な人の手によつて使用されるために、個人的能力に応じて分配されること、(三)これらの部門のいずれにおいても不足や混雜の生ずる惧れないように、生産を組織すること。」ところが現状においては、資本家および所有者によつて労働要具の割當が行われているために、これらの條件のど

れ一つとして、無数の暗中摸索と度重なる失策と不幸な經驗とを経ずして實現されているものはないし、將來もおそらくそうであろう。たとえ實現されても、そこに得られた結果はつねに不完全なものであり、つねに一時的なものに過ぎない。「各個人はめいめいの個人的知識にゆだねられていて、生産を統轄する全體的觀察 (vue d'ensemble) が全く無き。生産は識別なしに、豫見なしに行われている。或る方面では不足し、或る方面では過剰である。産業的危機が起るのは、消費の要求と生産の資源とにたいする全體的觀察 (vue vue generale) が欠けているからであつて、このような危機の起原については從來多くの誤説が述べられたし、現在なお日々述べられつつある。社會活動のこうした重要な部門において、かくも多くの混亂、かくも多くの無秩序が現われているのが見られるとすれば、それは、産業の要求も、その要求をかたいうる人間や手段をも知らない、孤立した個人によつて、労働要具の分配が行われているからである。災禍の原因は決してこれ以外にはない」(旁點は原文イタリックの部分)——といふのである。¹⁷

それでは、サン・シモン派が提唱する未來の社會はいかなるものであるか。「解義」によれば、「そこでは、企業の選擇と労働者の運命とを規制する者は、もはや、産業労働に門外漢の孤立的な所有者・資本家ではない。一つの社會的協會 (une institution sociale) が、今日かくも拙劣に遂行されている職務をゆだねられる。この協會があらゆる生産要具の受託者となり、あらゆる物質的收奪を統轄することとなつて、それによつて産業的アトリエのあらゆる部分と同時に見渡さしめるような全體的觀點に立ちうるわけである。この協會は、その支所 (ramifications) によつて、あらゆる地區、あらゆる種類の産業、あらゆる労働者と接觸を保つがゆえに、全般的要求と個人的要求とを理解することができる。腕と要具を必要とするところへもつてゆくことができる。要するに生産を指導し、生産を消費と調和させ、最もふさわしい産業人に労働要具をゆだねることができるのである。なぜなら、協會は絶えず産業人の能力を識ろうと努力しており、したがつてその能力を發達させうる最良の立場にいるからである。」こうした假定のもとに新しい社會を考へてみると、そこでは、

あらゆるものが相貌を一變することになる。「物質的保證と同様に、道義的および知的保證 (Les garanties morales et intellectuelles) も存在する。勞働は人類社會の状態および人類の住む地球の状態が許す最大限度まで立派に行われる。産業の首長 (chefs) ・王侯 (prince) となることを要求しうべき人物の範圍 (le cercle) は全人類を包括するし、立派な選擇を行う機會は増加し、こうした選擇をする手段は完成される。」かくして全體的觀察の欠如と生産要具の盲目的配分から生じた無秩序は無くなり、「今日いかなる平和的勞働者といえどもそれから免れてゐるとは自ら信じえない不幸・失敗・倒産も、消滅する。つまり、産業が組織され、一切が連結され、一切が豫見される。(l'industrie est organisée, tout s'enchaîne, tout est prévu) すなわち分業は完成され、努力の結合 (la combinaison des efforts) は日に日に一段と力強いものとなる。」(旁點は原文イタリックの部分)

以上、「サン・シモン敎說解義」の一部をかえりみたところによつても、サン・シモン派、わけてもバザールが、すくなくとも社會思想的方面に於ては、「主としてサン・シモンの學說の皮相的・半宗教的な面だけを會得」したのでは決してなく、その本質的な面を深く理解し、さらにこれを發展させ前進せしめたことは明らかであろう。かれらは相續權を否定し、所有をして國家よりの受託たらしめんとしたのであつて、そこにこそ、サン・シモン派の名を社會思想史上に特筆大書せしむる業績を認めなければならぬ。

註 1 l'École saint-simonienne (l'École Saint-Simonienne,

Técolé Saint-Simonienne) 2 聖シモン派 3 Cf. Maxime

Leroy: Histoire des idées sociales en France (de

Babeuf à Tocqueville), Paris 1950 George weill, l'Écolé

Saint-Simonienne, Paris 1896.

2 La Grande Encyclopédie (éditée par Berthelot),

l'article du Saint-Simonisme. 2 Olinde 3 聖シモン派 4

5 聖シモン派

6 C. Bouglé: Socialismes français, Paris 1951, p. 77. 13

Duveyrrier 4 17 5 聖シモン派 6

7 聖シモン派 8 聖シモン派 9 聖シモン派 10 聖シモン派

11 Les précurseurs français du socialisme, p. 227. 12 13

- Bazard-Saint-Amant と同じく、Saint-Amant Bazard と書かれるのが普通であるから、このことは後述した。
- 5 一八二六年四月から月刊となった。Sébastien Charléty : Histoire du Saint-Simonisme (1825—1884), p. 31.
- 6 L'Organisateur, journal des Progrès de la Science générale, avec un appendice sur les méthodes et les découvertes relatives à l'enseignement. 一八三〇年四月十八日から Journal de la doctrine de Saint-Simon と改題して一八三一年三月二十六日から Gazette des Saint-Simoniens と改題した。 Cf. Char.éty, pp. 79—80.
- 7 一八二四年版の Doctrine saint-simonienne. Librairie Nouvelle, Paris. Cf. Char.éty, p. 49.
- 8 Cf. F. Muckle: Die grossen Sozialisten, II. S. 39 ff.
- 9 Char.éty, pp. 29—30.
- 10 一八二六年にオーギエント・ロンヤが實證哲學講演を三回行った(本稿は昭和二十七年年度科学研究費による「十九世紀前半におけるフランス社会思想の研究」の一部である)
- 11 わたしが行なったことも、サン・シモン派のこうした企畫に影響してゐると思われる。なおロンヤが病氣のため中絶したこの講演を再開するのは一八二九年一月のことである。サン・シモン派の講演會開始よりも遅らしてゐる。(Cf. Char.éty, p. 49.
- 12 Char.éty, p. 49.
- 13 Leroy: Histoire, p. 323. ダントンのキーンの遺稿に「サン・シモン教の解義」に於いて語つてゐる。Muckle, s. 39ff.
- 14 Les précurseurs français du socialisme de Condorcet à Proudhon. Textes réunis et présentés par Maxime Leroy. (Sources de la pensée contemporaine). Paris 1848.
- 15 Ibid, p. 191 (Doctrine, 94).
- 16 Ibid, pp. 220—221 (Doctrine, 253).
- 17 Ibid, pp. 222—223 (Doctrine, 253—254).
- 18 Ibid, pp. 223—224 (Doctrine, 253—254).
- 19 Ibid, pp. 224—225 (Doctrine, 254).